View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Okayama University Scientific Achievement Repository

岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第154号（2013）73－77

中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス

酒向　治子　・　永田　麻里子*　・　出原　智波**
山口　順子***　・　猪崎　弥生****

Keywords：ダンス，ジェンダー・イメージ，ジェンダー・バイアス

1．はじめに

これまで筆者らは，男女共習のダンス授業モデルを構築するために，その理論的基礎となる中学生のダンスに対するイメージと態度についていくつかの調査を行ってきた（猪崎，2012，2013／酒向，2013a，2013b）。これらの調査は，これまで「ダンス＝女性的」という図式で語られる傾向にあったダンスのイメージについて，2012年度に中学校のダンス必修化を迎えた今，再び問い直す時期に来ているのではないかという問題意識を踏まえて行ったものである。その中で2013年に地方都市の市立中学校における男女103名を対象に行った調査（酒向，2013a）では，男子はダンスに対して「どちらかといえば男らしい」と思っているのに対し，女子は「どちらかといえば女らしい」と思っているという従来型のダンスのイメージを覆すような結果を得た。またこの調査では，女性教員は「女性的なイメージを持っているとダンスをすることに抵抗感がある」という相関が認められた一方で，生徒は男女ともにこれらの相関は認められなかったという結果も得ている。このことから，「男らしい／女らしい」といったダンスについての性別による偏見を意味するジェンダー・バイアスについて，中学生ではあまり従来型の図式があてはまらなくなってきていること，また「ダンスをやりたい／やりたくない」という抵抗感との関係では，必ずしも抵抗感とダンスのイメージが結びついていないという示唆を得た。しかし，この調査は103名を対象にした限定的なものであり，対象人数を増やした追加調査を行う必要性が課題として残った。

2．目的

本研究では，上述した研究課題を受け，対象人数を増やした形で再度中学生にダンスのイメージと態度についての質問紙調査を行う。その結果を前回の調査（酒向，2013a）で得られた結果と比較することにより，ダンスのイメージと態度についてのより掘り下げた考察を行うことを目的とする。

3．方法

実施時期　（A中学校）2012年10月28，31日，11月19日
（B中学校）2013年1月9，10日

被験者　A中学校に在籍する1年生（7クラス）計216名とB中学校に在籍する1年生（5クラス）計188名。男女の内訳を表1に示す[1)]。

岡山大学大学院教育学研究科　生活・健康スポーツ学系　保健体育講座　700－8530　岡山市北区津島中3－1－1
*お茶の水女子大学　〒112－8610　東京都文京区大塚2－1－1
**元岡山市立操山中学校教諭
***岡山大学教育学部附属中学校教諭
****お茶の水女子大学　〒112－8610　東京都文京区大塚2－1－1

Gender Bias in the Dance Image of Junior High School Students

Haruko SAKO, Mariko NAGATA*, Chinami IDEHARA**, Junko YAMAGUCHI***, and Yayoi IZAKI*
Physical Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama city 700-8530
* Ochanomizu University, 2-1-2 Otsuka Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610
** Misaoyama Junior ex-High School Teacher
*** Junior High School Attached to the School of Education, Okayama University, 2-13-80 Higashiyama, Naka-ku, Okayama city 703-8281
**** Ochanomizu University, 2-1-2 Otsuka Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

表1　回答者の内訳

	男子	女子
A中学校	108（50.0%）	108（50.0%）
B中学校	95（50.0%）	93（49.5%）
	203（50.2%）	201（49.8%）

調査項目　1. 年齢を聞く項目，2. 体を動かすことに関する項目，3. ダンスをすることに関する項目，4. ダンスを観ることに関する項目，5. 人前でダンスをすることに対する抵抗感について聞く項目，6. ダンスは「男性的なイメージ」か「女性的なイメージ」かについて聞く項目，7. ダンスと聞いてイメージするものについて自由記述を求める項目の合計7項目。今回の分析では，1，5，6の項目のみ用いる。

手続き　初回ダンス授業前に，担当教員が質問紙を被験者に配布し，研究の趣旨を説明した上で回答を求めた。調査票への記名は求めていない。また，調査票の冒頭，回答および結果は研究に利用するのみで，他の目的に使用しないこと，回答結果はすべて統計的に処理しプライバシーが漏れることはないことを明記した。

4．結果

4．1　ダンスに対するイメージおよび抵抗感

4．1．1　ダンスに対するイメージ

ダンスに対するイメージについて「女らしい」1点，「どちらかといえば女らしい」2点，「どちらかといえば男らしい」3点，「男らしい」4点として，男女別・学校別の平均値と主効果・交互作用の有無について2要因分散分析を行った。表2に，男女別・学校別に算出した平均値および標準偏差を示す。

表2　ダンスに対するイメージの平均値と標準偏差

	A 中学校（n=216）				B 中学校（n=188）			
	男子（n=108）		女子（n=108）		男子（n=95）		女子（n=93）	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
ダンスに対するイメージ	2.32	1.03	2.17	0.76	2.36	0.81	2.47	0.62

2要因分散分析の結果，交互作用は認められず，学校間においてのみ主効果が認められた（表3）。男女ともに，A中学校よりもB中学校の方が有意に高い値を示した（F=4.28，p＜.05）。

平均値をもとに推定すれば，A中学校は2.25，B中学校は2.41であることから，ともに「どちらかといえば女らしい」と捉えており，その範囲の中でもB中学校よりA中学校の方がより女らしいと捉えている。

これを踏まえ，学校別に各項目の回答者の割合を算出したところ，図1に示す結果が得られた。すなわち，A中学校では，「女らしい」19.9%，「どちらかといえば女らしい」47.2%，「どちらかといえば男らしい」21.3%，「男らしい」11.6%であった。B中学校では，「女らしい」9.0%，「どちらかといえば女らしい」45.2%，「どちらかといえば男らしい」41.0%，「男らしい」4.8%であった。さらに，「女らしい」と「どちらかといえば女らしい」を選んだ回答者を“女らしい群”，「男らしい」と「どちらかといえば男らしい」を選んだ回答者を“男らしい群”とすると，A中学校では“女らしい群”が67.1%，B中学校では“女らしい群”が54.2%であった。

表3　ダンスに対するイメージにおける2要因分散分析の結果

要因	分散分析 df	F	P	編η2	比較検定
性別	1	0.07	0.80	0.00	
学校	1	4.28	0.04 *	0.01	A中学校＞B中学校
性別×学校		2.75	0.10	0.01	

*p<.05

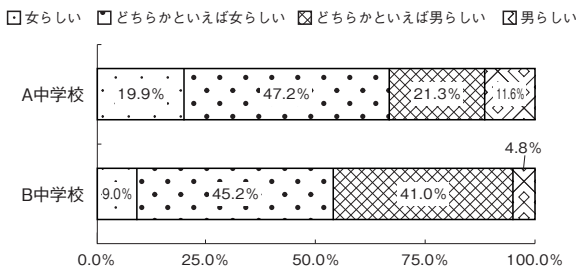

図1　学校別にみたダンスに対するイメージ

4．1．2　ダンスに対する抵抗感

人前でダンスをすることについて「抵抗はない」1点，「どちらかといえば抵抗はない」2点，「どちらかといえば抵抗がある」3点，「抵抗がある」4点として，男女別・学校別の平均値と主効果・交互作用の有無について２要因分散分析を行った。表4に，男女別・学校別に算出した平均値および標準偏差を示す。

表4　ダンスに対する抵抗感の平均値と標準偏差

	A 中学校（n=216）				B 中学校（n=188）			
	男子（n=108）		女子（n=108）		男子（n=95）		女子（n=93）	
	平均	ＳＤ	平均	ＳＤ	平均	ＳＤ	平均	ＳＤ
ダンスに対する抵抗感	3.19	0.92	2.67	0.96	2.66	1.00	2.77	0.80

２要因分散分析の結果，性別と学校間ともに主効果が認められた（表5）。性別に関しては，女子よりも男子の方が有意に高い値を示した（F=5.13，p＜.01）。学校間に関しては，Ａ中学校の方がＢ中学校よりも有意に高い値を示した（F=5.30，p＜.01）。さらに，性別と学校間に交互作用が認められた（表5，図2）。男子においては，Ａ中学校の方がＢ中学校よりも有意に高い値を示した（F=12.05，p＜.001）。

表5　ダンスに対する抵抗感における２要因分散分析の結果

要因	分散分析 df	F	P	編η2	比較検定
性別	1	5.13	0.02 **	0.01	男子＞女子
学校	1	5.30	0.02 **	0.01	A中学校＞B中学校
性別×学校		12.05	0.00 ***	0.02	男子：A中学校＞B中学校

p<.01、*p<.001

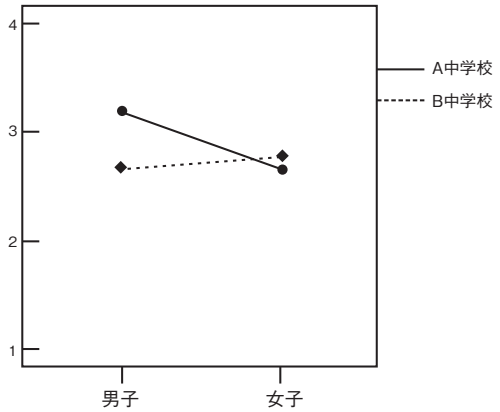

図2　ダンスに対する抵抗感の平均値

4．1．3　ダンスに対するイメージと抵抗感の関係

男女別・学校別にダンスに対するイメージと抵抗感との相関関係を調べたところ，Ｂ中学校の男子においてのみ負の相関が認められた（r=.205，p<.05）。すなわち，同中学校の男子は，ダンスに対して女性的なイメージを持っているとダンスをすることに抵抗感がある。

５．討議

５．１　ダンスのジェンダー・イメージについて

今回の調査では，全体としてダンス・イメージは平均値をもとに推定すると「どちらかといえば女らしい」，そしてその中でＡ中学校とＢ中学校の学校差のみが認められるという結果となった。前回の調査（酒向，2013a）では男女差（男子2.63，女子1.98）があり，男子と女子とでは異なる傾向があるように推定されたが，今回の調査では「どちらかといえば女らしい」という従来型のダンスのイメージに偏ることが認められた。しかし，このデータをよく検討すると，図1に示したように，Ｂ中学校においては，女らしい群と男らしい群がほぼ半々の割合で認められる。これをどのように解釈したらよいだろうか。

前々回（猪崎, 2013）で行ったイメージ調査では，ダンスに対するジェンダー・イメージを「男性的」「どちらともいえない」「女性的」の3つから1つを選択するよう指示した。その結果，男女とも「どちらともえいない」が7割以上であり，それが中学生のどのような意識を反映しているのかより詳細に検討するために，前回と今回の調査においては「どちらともいえない」という回答項目をはずし,「女性的」「どちらかといえば女性的」「どちらかといえば男性的」「男性的」の4つから1つを選択するように質問の方法を変えている。これは半ば強制的に「女らしいか」「男らしいか」の二群に振り分ける方法である。それにより今回の調査では「どちらかといえば女らしい」という結果が導かれたものの，Ｂ中学校において女らしい群と男らしい群が拮抗しているのを見ると，ダンスに対して男性的なイメージを抱く中学生も決して少なくない。中学生は「ダンス＝女性的」とみなしていると単純に捉えるのではなく，男性的なイメージを抱く者も多い，つまり，あえて質問されると「どちらかといえば女性的」と答えるものの，実際は女性的なイメージと男性的なイメージの間を揺れていると見るのが妥当ではないだろうか。前々回の調査結果である「どちらともいえない」が7割以上であったことは，中学生がダンスに抱くイメージの実状を反映していたと解釈することもできる。今回の調査対象校は2校であることから，現在の中学生のダンスに対するジェンダー・イメージを一般化するためには，地域を絞った複数校を対象としたさらなる追調査が必要であろう。

５．２　ダンス対する抵抗感について

ダンスに対する抵抗感については, 前回の調査（酒向，2013a）では男女ともにどちらかといえば抵抗感を持っているという結果を示し，女子より男子の方により強い抵抗感が見られた（男子3.18，女子2.54）。今回の調査においても，両校で男女ともどちらかといえば抵抗感を持っているという同様の傾向が認められた。また，女子より男子，Ｂ中学校よりＡ中学校の方に強い抵抗感が見られた。そして，交互作用を示した図2からわかるように，今回の調査で見出された学校差は，それぞれの学校における男女差の有無である。平均値を見ると，Ｂ中学校の男女とＡ中学校の女子は2.5以上で2.5に近い値であるのに対し，Ａ中学校の男子は3以上の値である。従って，Ｂ中学校で見られなかった男女差がＡ中学校で見られた理由は，Ａ中学校の男子が他の3群と異なる値を取っているからと言える。この結果はどのように解釈できるだろうか。

Ａ中学校とＢ中学校の授業背景の大きな違いの一つとして，生徒が過去に体育における表現の種目を授業として受けてきたかどうかが挙げられる。Ｂ中学校は小・中一貫校であり，体育領域で小・中連携が進んでおり表現の授業にも力を入れている。一方でＡ中学校は複数の小学校から生徒が集まる市立中学校であり，生徒は運動会で踊る以外に表現の授業を受けていない。ここで留意すべきは，ダンス授業の履修経験がダンスに対して肯定的なイメージとなり，ジェンダー・イメージも中立になる傾向があるという先行研究における言説である[2) 3) 4)]。Ａ中学校の男子がダンスに対して強く抵抗感が見られる理由に，Ｂ中学校の男子に比べて過去のダンス経験が少ないことが関連している可能性がある。また，Ｂ中学校のダンスのジェンダー・イメージが男女で拮抗しているのも，過去の授業の成果である可能性もある。しかしながら，Ｂ中学校においても全体的にはダンスに対して男女ともに抵抗感があること，また男子においてはダンスのジェンダー・イメージと態度との間に負の相関が見られることなどを考えると,「授業を受けていれば，抵抗感が薄くなる，ジェンダー・イメージは中立化する」と単純に結びつけることもできない。当たり前ながらこれまで検討されてこなかった,「どのような授業が抵抗感やジェンダー・イメージを変容させるのか」という視点から，授業の内容（教材，指導法）に詳しく迫った研究が今後の重要な検討課題となるだろう。また, ジェンダー・イメージと態度の間に，Ｂ中学校の男子以外は負の相関がなかったことも，逆の見方をすれば着目すべき点の一つである。これは, 前回の調査（酒向, 2013a）で指摘したように, ダンスのジェンダー・イメージと抵抗感の単純な結びつきが成りたっていないことを示す結果ともいえるのではないか。

いずれにしても今回の調査結果は，学校差も大き

く浮上するなど，様々な要因が絡み合った，かなり複雑に錯綜した現状を現前化している。今後対象校を増やした規模の大きい調査によって，中学生のダンスに対するイメージや抵抗感についての傾向をより明らかにしていきたい。

〔付記〕
本研究は，科研費（22310160）および科研費（24700623）の助成を受けたものである。

注

1）被験者のうち103名（全体の25.5％，A中学校の47.7％）は，前回の調査（酒向，2013a）の対象者と重なる。

2）大学生を対象に，ダンスの学習体験がダンスのイメージの変容にどのように影響するかを検討した結果，ダンスに対して肯定的なイメージ項目の数値が高くなると同時に，性的なイメージ項目の値が中立に近づいたと報告している（石井・武井，1996）。

3）宮本（2002）は，中学生を対象に授業前後のジェンダー・バイアスの変容を検討した質問紙調査において，ジェンダー・バイアスが中立の方向に変容することを報告している。

4）筆者らの前回の調査（猪崎, 2013）においても，授業後の感想から否定的にダンスをとらえていた男子が肯定的な捉え方をする傾向が見られた。

参考文献

猪崎弥生・永田麻里子・酒向治子(2012)大学生はダンスにおける「男らしさ」「女らしさ」をどのように捉えているか-質問紙調査に基づく検討-.スポーツとジェンダー研究　10:16-22.

猪崎弥生・酒向治子・永田麻里・永田麻里子・田中俊之・米谷淳（2013）中学校のダンス・イメージ，ダンスに対する態度，ダンス授業の評価：質問紙調査を基に．お茶の水女子大学人文科学研究９：15-24.

石井千代江・武井正子(1996)男女共修のダンス学習に関する基礎的研究II-男・女学生のダンスに対するイメージの変容を通して―．日本体育学会大会号861.

酒向治子・永田麻里・出原智波・角南順子・猪崎弥生（2013a）教員と中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス.岡山大学大学院教育学研究科研究集録 152:45-49.

酒向治子・永田麻里・出原智波・猪崎弥生（2013b）中学生のダンスに対するイメージ―男女差の検討―. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録 153:97-101.

宮本乙女(2002)ダンス学習とジェンダー　報告２―ダンス学習による学習者と指導者の意識の変容―．お茶の水女子大学附属中学校紀要32:103-118.